

キャンパスライフの 20 年

— 香川大学学生生活実態調査報告書による経年分析 —

西 本 佳 代 (キャリア支援センター)

1. はじめに

本稿の目的は、『香川大学学生生活実態調査報告書』を用いて、香川大学生の 20 年間の変化を検討することにある。

この 20 年間の大学生の変化は著しい。進学率は、平成元（1989）年の 24.7%から、平成 23（2011）年の 51.0%まで上昇した（文部科学省）。4 人に 1 人が大学へ通う時代から、2 人に 1 人が大学へ通う時代へと変化し、学生の多様化がより一層進んでいる。その一方、大学自体の変化も目覚ましい。1991 年の大学設置基準の大綱化、2004 年の国立大学の独立行政法人化を受け、大学の組織改編、教育改革が相次いだ。20 年前の大学では考えることのできなかつた教育や支援を今の学生は受けることができる。そうした学習環境や生活支援の充実もまた、学生を変化させる一因となっている。

こうした学生たちについて、近年、その変化を実証的に明らかにしようとする学生調査が蓄積されている。武内ら（2003、2005）の一連の調査では、近年の学生が、授業出席率や授業外学習の時間が上昇した「まじめ化」した状態にあること、アルバイト従事者が若干減少傾向にあること、さらには教養文化が衰退傾向にあることなどが指摘されている。また、全国大学生協の調査においても、学生生活の重点として、クラブや人間関係よりも、勉強を挙げる学生が近年増加していることなどが明らかにされている（全国大学生生活協同組合 2011）。

今や、こうした学生調査は、大学改革の観点からなくてはならないものとなっているといえるだろう。山田（2009）が指摘するように、「現在の大学生の学習状況、意欲を含めた包括的な学生文化に関するデータおよび大学生が大学生活を通じていかに成長し、どのような能力やスキルを身につけるかという成長過程のデータに基づいた教育評価を構築することで、初めて効果的な教育課程やカリキュラムへとつながる」（5 頁）。すなわち、効果的な教育課程やカリキュラムを構築するために、大学生の現状を示す学生調査が必要不可欠になっているのである。

そこで、本稿では、『香川大学学生生活実態調査報告書』を用いて、香川大学生の 20 年にわたる変化について検討したい。この 20 年の間に香川大学生にどのような変化がみられたのか明らかにする。そのことが、香川大学における効果的な教育課程、カリキュラムを構築することにつながると考える。

2. 分析方法

香川大学生の 20 年間の変遷を検討するため、本稿では、『学生生活実態調査報告書』を用いた。『学生生活実態調査報告書』とは、「学生生活の実態を把握し、大学の諸施策の基礎的資料として活用す

ることを目的」(『第1回 学生生活実態調査報告書』まえがきより)に、昭和61(1986)年より香川大学で実施されている質問紙調査の結果をまとめた報告書である。昭和61(1986)年以降、ほぼ隔年で実施され、平成20(2008)年には『第11回 学生生活実態調査報告書』をまとめるに至った。

調査を続けていく中で若干の修正があったものの、質問項目についてはほぼ同じ内容を用いており、香川大学生の経年変化を追うのに非常に適している¹⁾。なお、第5回については、その他の回とは方針を変えて調査が実施された。そのため、以下に示すグラフの多くで値が空欄となっている。他の回と同様の質問項目がある場合のみ数値を参照した。

図表1は、各回で調査対象者とした学生の属性を示したものである。香川大学には、平成9年に工学部が設置されており、第6回調査以降工学部生も調査に参加している。また、平成15年には、旧香川大学と旧香川医科大学の統合により新しい香川大学が発足しており、第9回調査からは医学部も調査に参加している。男女比については、第1回、第2回の男性比率が若干高くなっているものの、第3回以降は大きな偏りはみられない。

調査方法については、第1回から第10回までは、無作為抽出法を採用した。第1回から第5回までは全学生の4分の1、第6回から第10回までは全学生の5分の1を選び、調査票の配布・回収を行った。そのため、抽出率が第1回から第5回までは約2割、第6回から第10回までは約1割というように差がでている。なお、第11回については、学部学生全員を調査対象とし、Web上で調査が実施された。

図表1 調査概要と調査対象者の属性

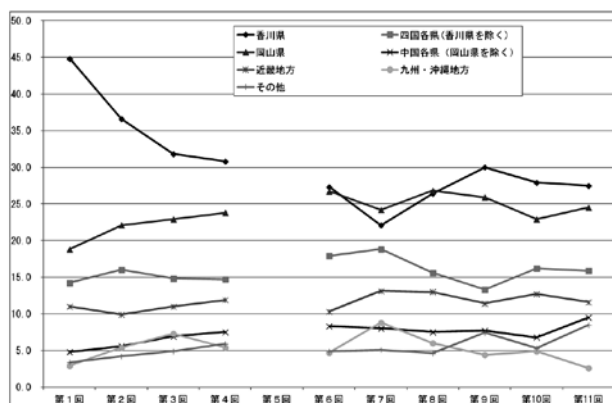
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回
調査年	昭和61年	平成元年	平成4年	平成6年	平成8年	平成10年	平成12年	平成14年	平成16年	平成18年	平成20年
教育学部	30.5	28.8	33.0	25.7	30.5	30.7	15.8	16.3	16.8	14.6	20.6
法学部	18.9	19.0	16.7	18.0	15.4	17.1	19.7	12.2	10.7	13.8	9.1
経済学部	32.7	34.6	30.9	39.1	35.2	28.9	29.7	31.9	24.5	18.4	16.0
医学部	—	—	—	—	—	—	—	—	16.7	18.0	15.1
工学部	—	—	—	—	—	5.1	13.3	22.2	20.4	20.7	29.2
農学部	17.9	17.6	19.3	17.2	18.8	18.2	21.5	17.3	10.9	14.2	10.1
合計	100.0(813)	100.0(875)	100.0(884)	100.0(949)	100.0(786)	100.0(554)	100.0(512)	100.0(630)	100.0(731)	100.0(711)	100.0(583)
男性	64.6	63.2	59.7	58.5	50.0	49.3	53.5	54.4	52.4	54.4	58.2
女性	35.4	36.8	40.3	41.5	50.0	50.7	46.5	45.6	47.6	45.6	41.8
合計	100.0(813)	100.0(875)	100.0(884)	100.0(949)	100.0(786)	100.0(554)	100.0(512)	100.0(630)	100.0(731)	100.0(711)	100.0(579)
抽出率	20.1	19.7	19.4	19.9	16.1	11.3	10.1	12.0	12.2	12.3	10.4

3. 香川大学生の変遷

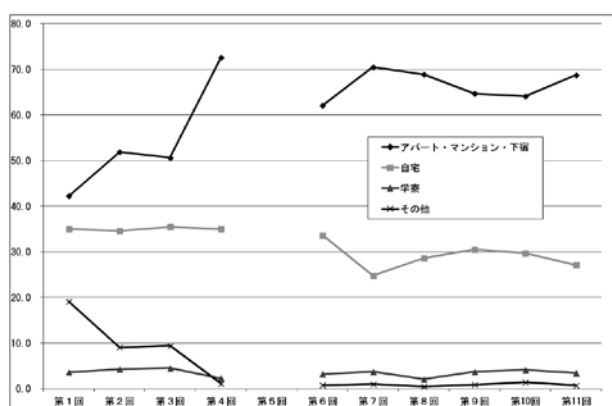
以下では香川大学生の20年を検討するが、『学生生活実態調査報告書』に記載された全ての内容を取り上げることは紙幅の都合許されない。そこで、属性、経済状況、学業、サークル・アルバイト、ボランティア、就職、健康という特徴的な7点に絞り検証したい。

3-1. 属性

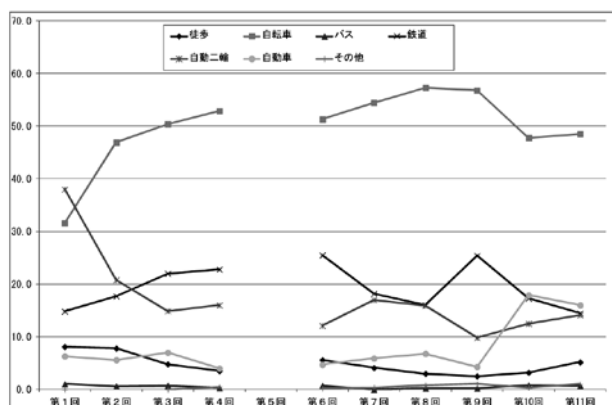
まずは、この20年の間に香川大学生にどのような変化がみられたのか。彼らの属性の変化を追うため、出身地、住居、通学方法についてみてみよう。



図表2 出身地



図表3 住居



図表4 通学方法

調査からは、第1回から第11回の調査までの間に、香川県出身者の割合が下がっていること、自宅から通う学生の数が増加していることが明らかになった。香川大学は、香川県出身者が自宅から通う大学から、多様な地域の出身者がアパートやマンション、下宿に住みながら通う大学へと変化している様子がうかがえる。

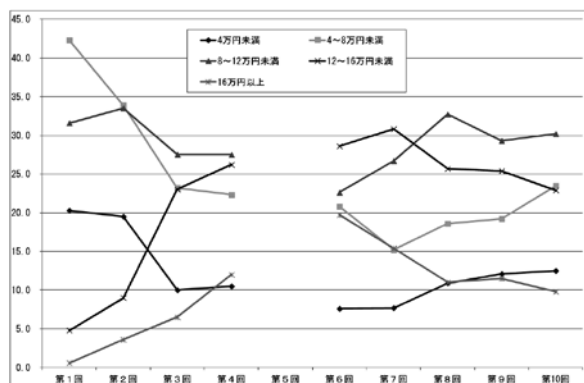
出身地については、香川県出身者が減少し、岡山県出身者が増加傾向にある。香川県出身者は、第1回の44.8%から第11回の27.9%まで減少している。一方、岡山県出身者は、第1回調査では18.8%だったものが、第11回調査では24.5%まで増加している²⁾。

住居については、アパート・マンション・下宿に住む学生が増加し、自宅から通う学生が減少している。アパート・マンション・下宿に住む学生は、第1回には42.3%だったが、第11回には64.1%と半数以上を占めるようになった。一方、自宅から通う学生は、第1回の35.0%から第11回の29.7%と減少傾向にある³⁾。

通学方法については、自転車で通学する学生が増加している。第1回では31.6%だったが、第11回では48.5%となっている。また、自動車通学する学生も第9回以降増加しており、第9回の4.3%から第11回の16.3%へと変化している⁴⁾。

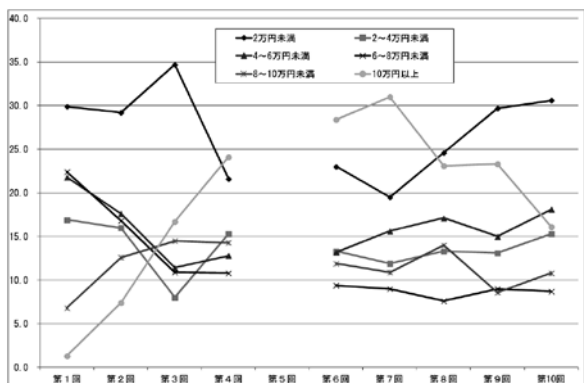
3-2. 経済状況

また、この20年の間には社会の経済状況も大きく変化している。続けて学生の経済状況を確認するため、1カ月の収入額、仕送り額、支出額をみてみよう⁵⁾。



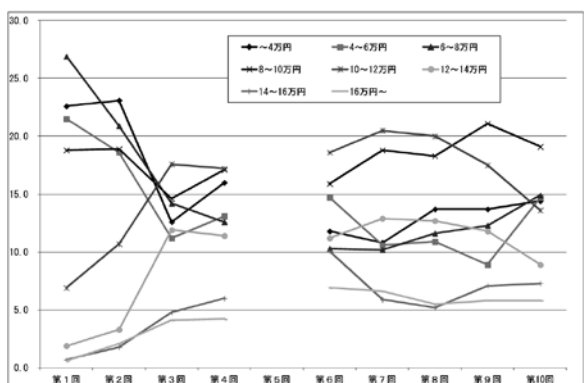
図表5 1カ月の収入額

1カ月の収入については、大きく分け8万円未満の学生が減少し、12万円以上の学生が増加している。「4万円未満」、「4～8万円未満」の学生の合計は、第1回の62.6%から第10回の36.0%へ減少した。一方、「12～16万円未満」、「16万円以上」の学生の合計は、第1回の5.4%から、第6回の47.8%へと増加した。



図表6 1カ月の仕送り額

1カ月の仕送り額については、「6～8万円未満」、「10万円以上」の選択肢についてのみ大きな変化がみられた。「6～8万円未満」の学生は、第1回の22.4%から第10回の8.7%へ減少し、「10万円以上」の学生は、第1回の1.3%から第10回の16.1%へと増加した。他の選択肢については大きな変化はみられない。



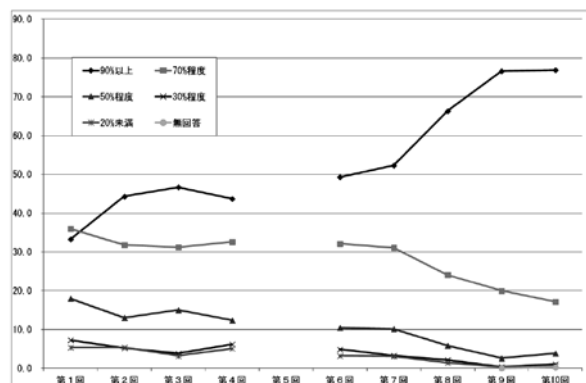
図表7 1カ月の支出額

1カ月の支出額は、大きく分け8万円未満が減少し、10万円以上が増加するという傾向がみられた。「4万円未満」、「4～6万円未満」、「6～8万円未満」の合計は第1回の71.0%から第10回の44.0%へ減少した。一方、「10～12万円未満」、「12～14万円未満」、「14～16万円未満」、「16万円以上」の合計は第1回の10.1%から第10回の35.6%へ増加した。

学生の経済状況の変化からは、収入、支出共に概して増加傾向にあることがわかる。しかし、1カ月の収入が12万円以上ある学生は、第6回調査時に最多で、その後は減少しており、今の学生たちの生活が必ずしも裕福な状態にないこともうかがえる。

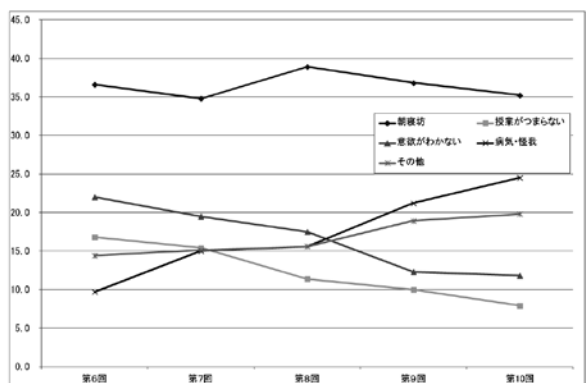
3-3. 学業

さらに学生の本分である学業についてはどのような変化がみられたのか、続けて、授業の出席率、欠席の理由、授業外での学習時間についてみてみよう⁶⁾。



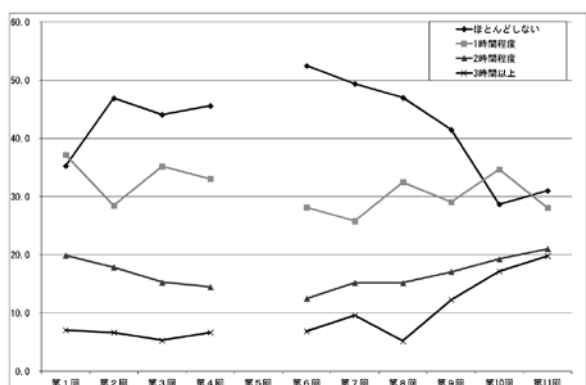
図表8 授業の出席率

授業の出席率は上昇している。90%以上出席する学生は、第1回の33.3%から第10回の76.9%へと増加した。一方、70%程度、50%程度、30%程度などの90%に満たない出席率の割合は総じて減少傾向にある。特に、70%程度の出席率は、第1回の36.0%から第10回の17.2%まで減少した⁷⁾。



図表9 欠席の理由

授業を欠席する理由として、「病気・怪我」を挙げる学生が増加し、「意欲がわかない」、「授業がつまらない」を挙げる学生が若干減少している。病気・怪我を理由に授業を休む学生は、第6回の9.7%から第10回の24.5%へ変化した。



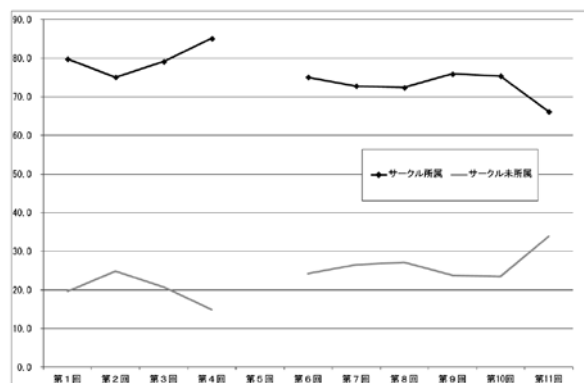
図表10 授業外での学習時間

授業外での学習時間は増加している。授業外での学習をほとんどしない学生は、第1回で35.3%だったのが第10回では31.0%へ、また1時間程度学習する学生は第1回の37.2%から第10回の28.1%へと減少している。その一方、2時間程度、あるいは3時間以上学習する学生の割合は微増している⁸⁾。

学習状況の変化からは、学生の「まじめ化」の傾向がうかがえる。授業に90%以上出席する学生は増加し、意欲がわかないや授業がつまらないといった理由で欠席する学生が減っている。さらには、授業外での学習時間も上昇傾向にある。こうした「まじめ化」の傾向は、先述の武内ら（2003、2005）の研究でも指摘されている学生の特徴である。

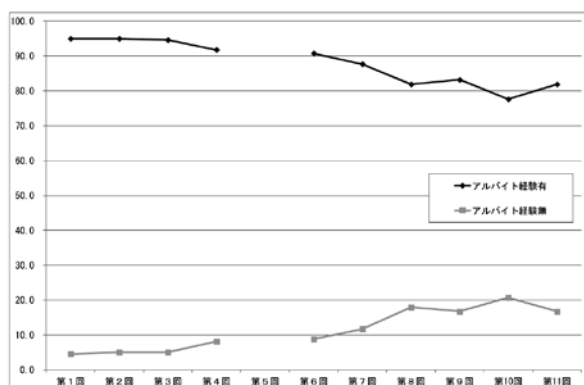
3-4. サークル・アルバイト

他方、学業以外の正課外の活動についてはどうなっているのだろうか。次に、サークル・アルバイトの変化をみてみたい。



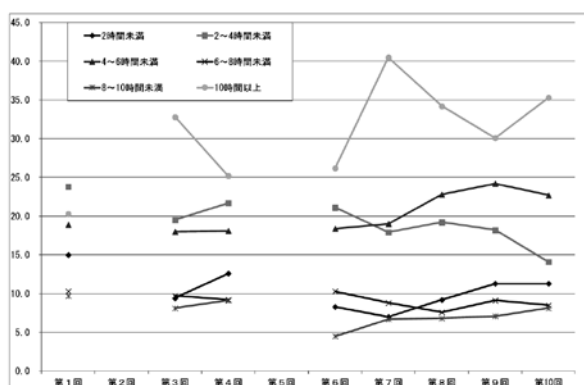
図表 11 サークル所属

サークルに所属していない学生は増加傾向、所属している学生は減少傾向にある。所属している学生は、第1回の79.8%から第11回の66.2%へと変化した。一方、所属していない学生は、第1回の19.6%から第11回の33.8%へと変化した。



図表 12 アルバイト経験の有無

アルバイト経験については、若干ではあるが、経験有の学生が減少し、経験無の学生が増加している。アルバイト経験有については、第1回では95.0%だったが、第11回では81.9%になっていた。また、アルバイト経験無については、第1回では4.6%だったが、第11回では16.7%になっていた⁹⁾。



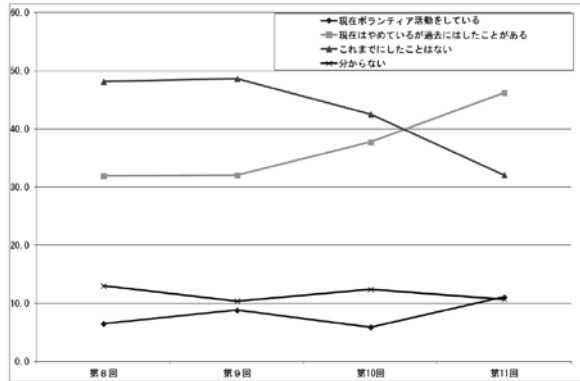
図表 13 1週間のうちアルバイトに費やす時間

1週間のうちアルバイトに10時間以上費やす学生の割合は増加している。第1回では20.3%だったが、第10回では35.3%へと変化する。それ以外の「2時間未満」「2～4時間未満」「4～6時間未満」「6～8時間未満」「8～10時間未満」についてはそれほど大きな変化はみられない。

サークル・アルバイトの検討からは、サークル、アルバイト共に行ったことのない学生が増加していることがわかる。ここからは学生の課外活動が衰退しているともいえそうだが、その一方、アルバイトに10時間以上を使う学生の増加も確認できた。こうした結果からは、学生の時間の使い方が多様化していることが推察される。

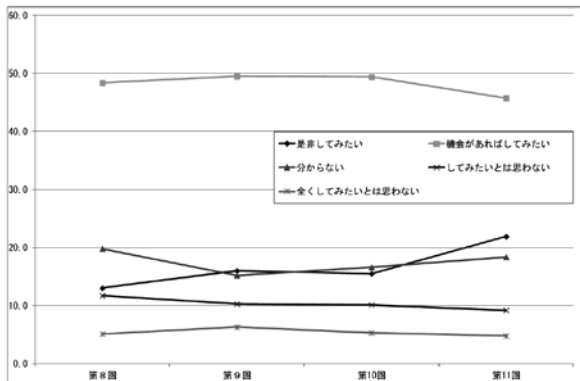
(5) ボランティア

さらに、課外活動としてボランティアに対する意識・行動の変化についてもみてみたい。ボランティア活動の経験、関心、やってみたいボランティアは次のように変化した¹⁰⁾。



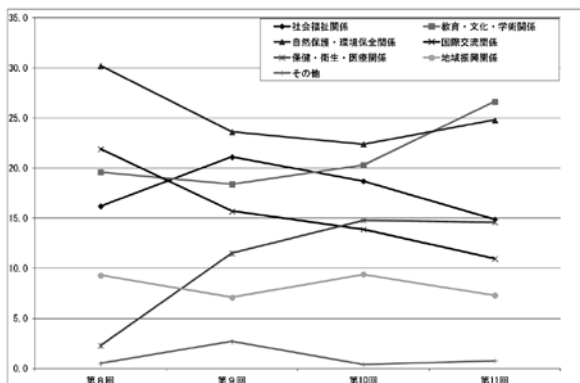
図表 14 ボランティア活動の経験

ボランティア活動の経験については、「これまでにしたことがない」という学生が減少傾向にある。第8回の48.1%から第11回の32.1%まで減少した。その一方、「現在はやめているが過去にはしたことがある」という学生が増加しており、第8回の31.9%から第11回の46.2%へと変化している。



図表 15 ボランティア活動に対する関心

ボランティア活動に対する関心は高まりつつある。ボランティア活動を「是非してみたい」という学生は、第8回の13.0%から第11回の21.9%へ、その一方で「してみたいとは思わない」は第8回の11.7%から第11回の9.2%へと若干ではあるが減少した。



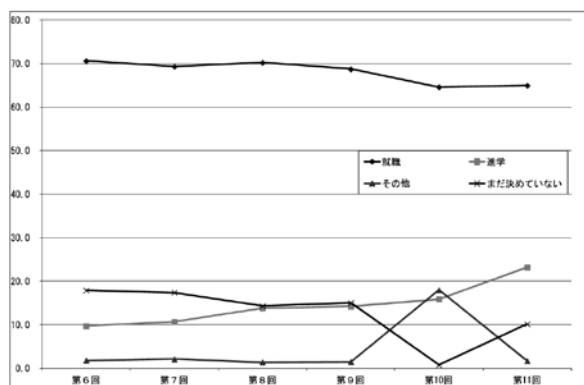
図表 16 今後やってみたいボランティア活動

ボランティア活動を「是非してみたい」「機会があればしてみたい」と回答した学生にどのような活動をしてみたいか聞いた。その結果、「教育・文化・学術関係」、「保健・衛生・医療関係」に近年注目が集まっていることが確認できた。それぞれ、第11回の値は「教育・文化・学術関係」26.6%、「保健・衛生・医療関係」14.6%となっている。

ボランティア活動の検討からは、概して近年の学生にとって、ボランティアが身近なものになりつつある様子がうかがえた。ボランティア未経験者の割合が減り、ボランティアを是非してみたいという学生の割合が増加している。

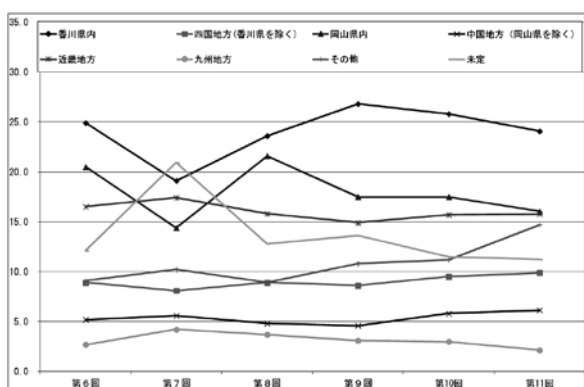
3-6. 就職

これまで学生生活の現状について確認してきた。続けて、将来に対する考えに変化がみられたのか検討するため、就職に関する内容をみてみよう¹¹⁾。



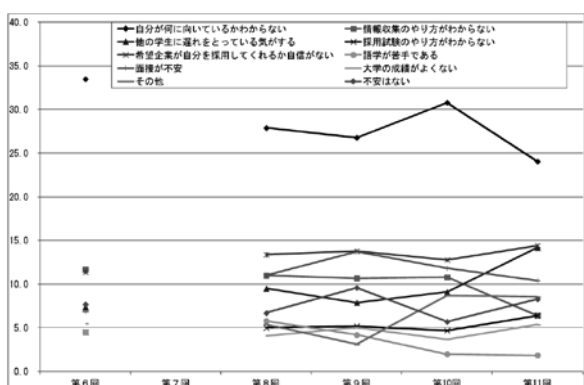
図表 17 進路希望

進路希望については、進学希望者の増加がみられる。進学希望者は、第6回の9.7%から第11回の23.2%へと増加した。一方、就職希望については、若干ではあるが減少している。第6回の70.6%から第11回の64.9%へ変化した。



図表 18 希望の就職場所

就職希望場所として最も多いのは香川県内、ついで岡山県内となっている。香川県内については、第6回から第11回まで、ほぼ20.0%から25.0%の間を推移している。岡山県内については、第6回から第11回まで、ほぼ15.0%から20.0%の間を推移している¹²⁾。



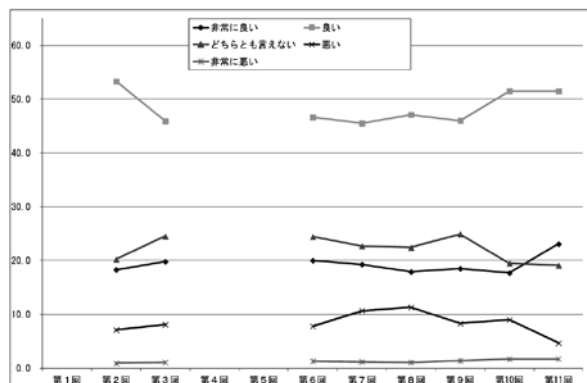
図表 19 就職に関して不安なこと

就職に関して不安なことについては、「自分が何に向いているのか分からない」を挙げる学生が減少傾向にある。第6回では33.5%だったが、第11回では24.1%まで減少している。他の選択肢については、約1割を維持している¹³⁾。

学生の就職をめぐる状況からは、香川県内・岡山県内での就職を希望する学生が多い状態が継続していることが明らかになった。香川県や岡山県といった地元志向の学生が多いことが香川大学生の特徴のひとつだといえるだろう。

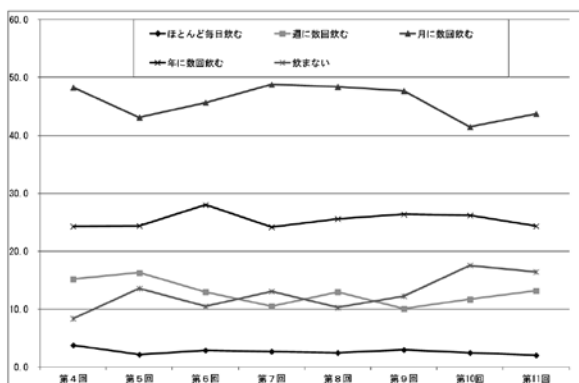
3-7. 健康

最後に、学生の健康状態はどのように変化したのか、健康状態、飲酒の頻度、喫煙の頻度について確認したい。



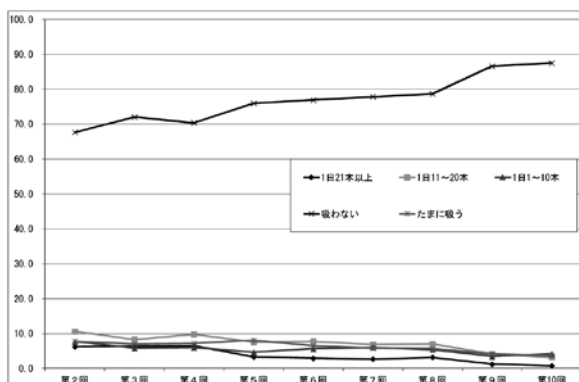
図表 20 健康状態

健康状態については大きな変化はみられない。「非常に良い」、「良い」の合計が約7割、「どちらとも言えない」が約2割、「悪い」「非常に悪い」の合計が約1割を維持している。若干の変化としては、第11回において、はじめて「非常に良い」が「どちらとも言えない」を上回ったことが挙げられる¹⁴⁾。



図表 21 飲酒の頻度

飲酒の頻度についても大きな変化はみられない。月に1回程度飲む学生が最も多く、4～5割程度を占めている。近年の傾向としては、全く飲まない学生が増えつつあることが挙げられる。第4回では8.4%だったが、第11回では16.4%にまで上昇している¹⁵⁾。



図表 22 喫煙の頻度

喫煙の頻度は減少傾向にある。煙草を吸わない学生は、第2回では67.7%だったが、第10回では87.5%まで増加した。また、「1日21本以上」は6.2%（第2回）から0.8%（第10回）へ、「1日11～20本」は10.6%（第2回）から3.2%（第10回）へ減少している¹⁶⁾。

健康状態の変化からは、香川大学生の健康状態が概してよくなっている様子がうかがえる。飲酒、喫煙をしない学生が増えている。自分の健康状態について、「どちらとも言えない」と評価する学生よりも「非常に良い」と評価する学生が多くなった背景にはこうした飲酒、喫煙の減少が挙げられるのかもしれない。

4. おわりに

本稿では、香川大学生の20年間の変化について、属性、経済状況、学業、サークル・アルバイト、ボランティア、就職、健康という7点に絞り検討してきた。最後に、これまでの検討から得られた知見をまとめたい。

- 1) 香川大学は、香川県出身者が自宅から通う大学から、多様な地域の出身者がアパートやマンション、下宿に住みながら通う大学へと変化している様子がうかがえる。
- 2) 学生の経済状況については、収入、支出共に概して増加傾向にあるが、12万円以上の高額収入の学生は近年少なくなっており、必ずしも裕福な経済状況にないことがうかがえる。
- 3) 出席率や授業外学習時間の上昇、理由なく欠席する学生の減少など、香川大学の学生についても「まじめ化」の傾向がうかがえる。
- 4) サークル、アルバイト共に行ったことのない学生が増加している一方、アルバイトに10時間以上を使う学生も増加しており、学生の時間の使い方が多様化していることが推察される。
- 5) ボランティア活動については、概して近年の学生にとって、身近なものになりつつある様子がうかがえた。
- 6) 就職をめぐる状況については、香川県内・岡山県内での就職を希望する学生が多い状態が継続していることが明らかになった。
- 7) 健康状態については、飲酒、喫煙をしない学生が増え、概してよくなっている様子がうかがえる。

これらの結果に鑑みると、一般的に語られる大学生論に香川大学の学生も一致する点が多くみられるといえるのではなかろうか。先述した学生の「まじめ化」はもちろんのこと、経済不況の影響を受ける学生生活や学生のサークル離れの様子、お酒を飲まない学生の増加も香川大学生の調査からは垣間見られた。

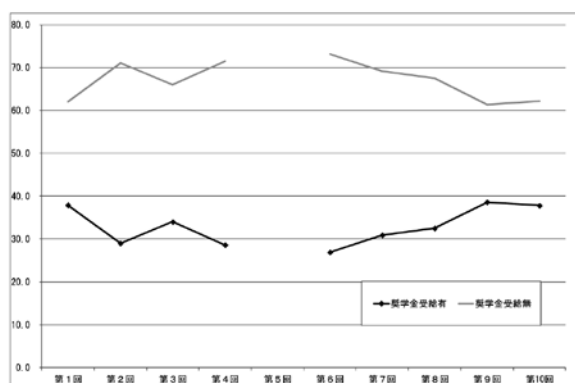
その一方、「地元志向」という地方国立大学ならではの特徴も浮かび上がってきた。就職希望先として、香川県内・岡山県内を挙げる学生は約4割にのぼる。また、近年減少傾向にあるものの、それでも学生の約半数は香川県・岡山県の出身者である。こうした香川大学生にみられる独特の傾向が今後どのように変化するか見守ると共に、全国の大学生に共通してみられる特徴の変化を追い、その時その時の学生に最も適した教育、支援を行う必要があるだろう。

以上、『学生生活実態調査報告書』を題材に香川大学生の20年を検討してきた。しかしながら、この実態調査は、香川大学生全体の1～2割を調査対象としており、この調査報告書だけで香川大学生全体の特徴を把握できるわけではない。特に、留学生や夜間主に通う学生、あるいは社会人学生などの伝統的な学生像とは異なる学生たちの実態調査は不足している。今後、そうした学生たちの実態調査を行いつつ、多様な学生にとって好ましい大学づくりを模索する必要があるだろう。それらについては、今後の課題としたい。

注

- 1) 無回答者数については、報告書によって記載してある回としていない回があるため、本稿のグラフ作成においては記載していない。回によっては、値の合計が100.0%にならない場合があるのはそのためである。

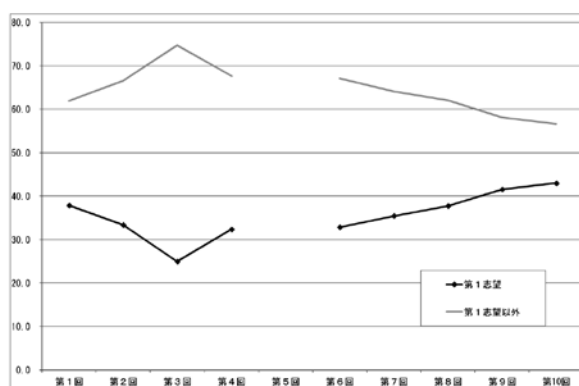
- 2) 設問は、第9回目までは「家族の居住地」、第10回からは「出身地」として聞いている。図表には第11回調査時の選択肢を示している。「九州・沖縄地方」の項目は、第9回まで「九州地方」と表記されていた。
- 3) 図表には第11回調査時の選択肢を示している。「アパート・マンション・下宿」の選択肢は、第3回目までは「アパート・マンション」となっていた。
- 4) 図表には第11回調査時の選択肢を示している。「その他」の項目は、第4回から第10回までは「船舶」となっていた。なお、第1回から第3回までは「船舶」の選択肢はない。また、「鉄道」は、第1回、第2回では「電車・汽車」、第3回では「電車」と記載されている。第9回以降の自動車通学の増加には、旧香川医科大学との統合が影響していると考えられる。
- 5) 経済状況については他に以下のような変化がみられた。



図表 23 奨学金の受給

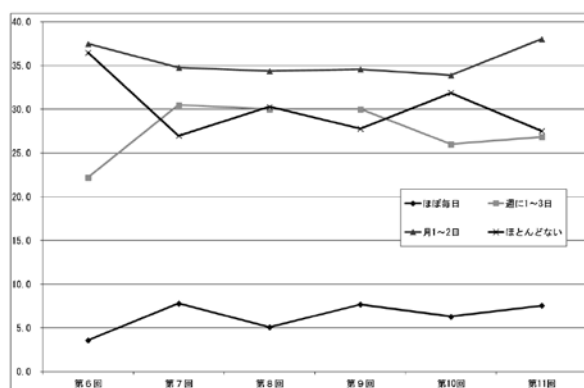
奨学金受給については、第1回から第10回まで一定している。受給無の学生は6～7割、受給有の学生は3～4割である。第10回では、受給無 62.2%、受給有 37.8%となっていた。

- 6) 学業については他に以下のような変化がみられた。



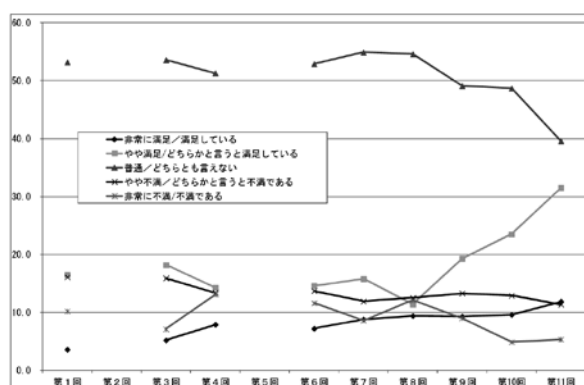
図表 24 進学希望

進学希望については、わずかではあるが、第1志望の学生が増加し、第1志望以外の学生が減少している。第1志望の学生は、第1回の37.9%から第10回の43.0%へ、第1志望以外の学生は、第1回の61.9%から第10回の56.7%へと変化している。



図表 25 図書館の利用状況

図書館の利用状況については大きな変化はない。若干、ほとんど利用しない学生が減少し、週に1～3日利用する学生が増加した。



図表 26 教官との交流

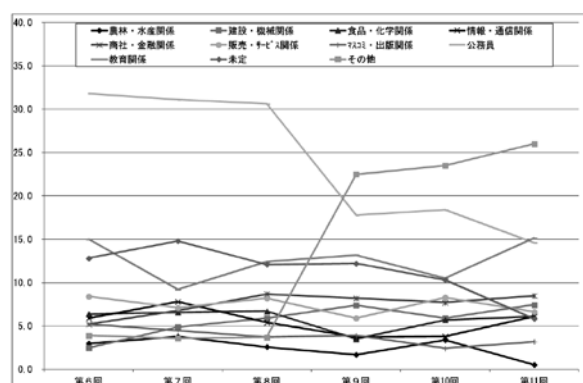
教官との交流については、若干ではあるが満足する学生が増加している。「普通 / どちらとも言えない」と回答する学生は第9回から減少し続け、「やや満足 / どちらかと言うと満足している」と回答する学生が第9回から増加した。

なお、第2回は、報告書から数値を確認することができなかったため、記載していない。第1回から第4回までは、「非常に満足」「やや満足」「普通」「やや不満」「非常に不満」の5件法を用いている。第5回から第11回までは、「満足している」「どちらかと言うと満足している」「どちらとも言えない」「どちらかと言うと不満である」「不満である」の5件法を用いている。

- 7) 第2回については、男女別の割合しか報告書には示されていない。そのため、男女別の数値から、全体の値を算出した。
- 8) 第2回については、「2時間程度」の割合が報告書に記載されていなかった。そのため、他の数値から「2時間程度」の割合を算出した。
- 9) 第6回以降授業期間中と長期休暇中に分け、アルバイトの時間を聞いている。ここでは、第6回以降は授業期間中の値をもとにグラフを作成している。なお、第7回調査報告書については本文中の値と巻末資料の値が異なっているため、本文中の値を参考にした。
- 10) 図表 14～16 のボランティア関連の質問は第8回以降のみ調査されている

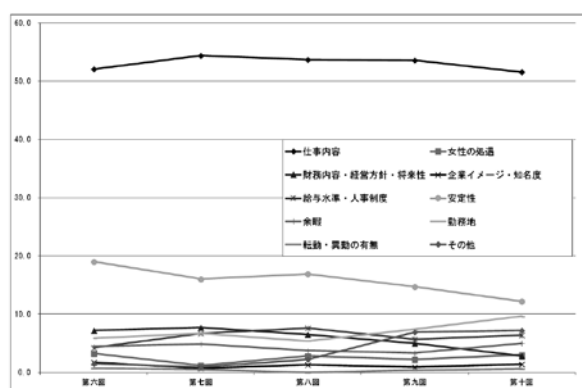
11) 図表 17 ～ 19 の就職関連の質問は第 6 回以降のみ調査されている。

就職については他に以下のような変化がみられた。



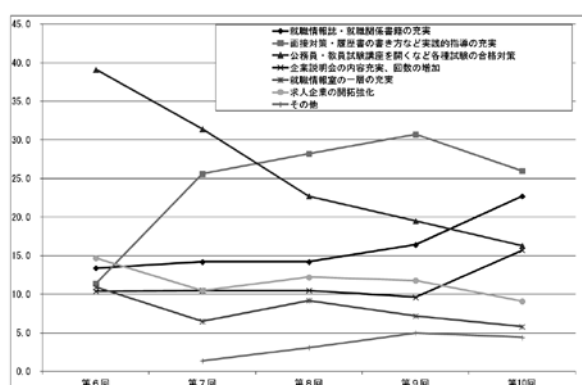
図表 27 就職希望の業種

就職希望の業種については、第 6 回から第 11 回にかけて、公務員希望の学生の減少がみられる。第 9 回以降、医学部生が調査対象者に入ると共に、選択肢に「保健・衛生・医療関係」（グラフ中では「その他」）が設けられたためだと推察される。なお、選択肢「情報・通信関係」は第 6 回のみ「電気・情報関係」と記載されていた。



図表 28 就職の際に重視する点

就職の際に重視する点としては、仕事内容を挙げる学生が多く、第 6 回から第 10 回までの間、5 割以上を維持している。近年の傾向としては、若干ではあるが、安定性を求める学生が減少している。第 6 回では 19.0%だったが、第 10 回では 12.2%になっている。



図表 29 就職支援に対する要望

就職支援に対する要望としては、「公務員・教員試験講座を開くなど各種試験の合格対策」が減少し、「面接対策・履歴書の書き方など実践的指導の充実」が増加した。前者は第 6 回の 39.1%から第 10 回の 26.0%へと減少した。後者は、第 6 回の 11.4%から第 10 回の 16.3%へと増加した。なお、第 6 回調査では、選択肢「その他」が設けられていないため、グラフ中に記載していない。

12) 第 6 回調査報告書については本文中の値と巻末資料の値が異なっているため、本文中の値を参考にした。また、選択肢「九州地方」は第 10 回、第 11 回調査では「九州・沖縄地方」となっていた。

13) 選択肢「採用試験のやり方がわからない」は第 11 回のみ「就職試験のやり方がわからない」と

いう選択肢に変更されていた。

- 14) 第1回と第4回においても健康状態を聞いているが、選択肢が他の回と大きく異なるため記載していない。
- 15) 第1回から第4回においても飲酒の頻度を聞いているが、選択肢が第5回以降と大きく異なるため記載していない。
- 16) 第1回、第11回においても喫煙の頻度を聞いているが、選択肢が他の回と大きく異なるため記載していない。

参考文献

『第1回 学生生活実態調査報告書』香川大学、昭和61年。

『第2回 学生生活実態調査報告書』香川大学、平成元年。

『第3回 学生生活実態調査報告書』香川大学、平成4年。

『第4回 学生生活実態調査報告書』香川大学、平成6年。

『第5回 学生生活実態調査報告書』香川大学、平成8年。

『第6回 学生生活実態調査報告書』香川大学、平成10年。

『第7回 学生生活実態調査報告書』香川大学、平成12年。

『第8回 学生生活実態調査報告書』香川大学、平成14年。

『第9回 学生生活実態調査報告書』香川大学、平成16年。

『第10回 学生生活実態調査報告書』香川大学、平成18年。

『第11回 学生生活実態調査報告書』香川大学、平成20年。

文部科学省『学校基本調査 年次統計』<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001015843&cyclo=0> (最終アクセス 2011/12/6)

武内清編、2003、『キャンパスライフの今』玉川大学出版部。

武内清編、2005、『大学とキャンパスライフ』上智大学出版。

山田礼子、2009、『大学教育を科学する－学生の教育評価の国際比較－』東信堂。

全国大学生生活協同組合連合会、2011、『第46回学生の消費生活に関する実態調査 CAMPUS LIFE DATE 2010』。